和歌山大学附属図書館蔵『温知和歌集』の成立

三村晃功

一　はじめに

八代将軍徳川吉宗や十四代将軍同家茂を排出した紀州和歌山藩には数多くの書物が蔵せられていたが、そのなかの歌書類は現在、和歌山大学附属図書館に移管されている。その歌書のなかに『温知和歌集』なる類題集が見出されるが、その書誌的概要について、国文学研究資料館のマイクロ・フィルムによって記すと、おおよそ次のとおりである。

和歌山大学附属図書館蔵。函架番号「国語／三四七／二／二三」。写本二冊。題簽は「温知和歌集　天（地）」。内題「温知和歌集　上（下）」。一面十行書きで、和歌は一首一行書き。墨付きは上冊七十四丁、下冊六十九丁。奥書の類は一切なし。江戸後期の写。総歌数は千三百二十八首。

ところで、本集については、福井久蔵氏『大日本歌書総覧上巻』（昭和四九・五復刻版、国書刊行会）に、「定家雅経より、逍遙院、徹書記、宋世、道堅等の歌を部立なく集めたるもの。題号は温故知新の語に取る。」と言及され

ているが、現時点ではこれが唯一の研究史である。とはいえ、本集の内容について多少の検討を加えてみると、ほんの一例にしかすぎないが、本集は次のごとき特色を有する。

そのひとつは、本集は正徹の詠歌を二十八首収載するが、そのうち、次の

1　一葉のみ落てぞみゆる今朝やまだ秋風ほそく木のまわく覧　（同〈新秋〉・正徹・三四）

2　七夕の織手にかけぬいと薄よそにみだれて秋風ぞふく　（同〈七夕〉・〈正徹〉四九）

3　もる田井に余りし水もつくばねのすそわの風にこほる冬哉　（氷・正徹・一一八）

4　卯月までたな引のこれ弥生山けふばかりなる雲も霞も　（三月尽山・正徹・一四二）

5　いつまでと契りをゐなの湊川からきうしほの中をわくらん　（寄湊恋・正徹・三〇六）

6　人心あらき風ともまだしらず袂の露のなにくだくらん　（寄風恋・正徹・一二九六）

の1～6の五首は、本集では「正徹」の詠作となっているのに、現在活字翻刻されている『私家集大成』や『新編国歌大観』などの書物には未収載であるので、これらの五首は新出歌の可能性を多分に有する詠歌ということになろう。

また、二条為重の次の

7　さかこえむ千代のうづえをきるからにむ月もとをき春はきにけり　（初春祝言・為重・一〇〇四）

8　ふる巣をばさきだつ春にあらためて年まち出る鶯のこゑ　（初春鶯・一〇〇五）

9　花にこそまだふゆごもれ梅が枝のさきかふ色を雪にまがへて　（白梅盛・一〇〇六）

10　いく千代もなをあひおいと契をけ今年みつ葉の宿の松がえ　（寄松祝・一〇〇七）

の7～10の歌群も、同様に現在、為重の私家集などの書籍には収載されていず、新出歌の可能性が高いと推察されよう。このように、本集の収載歌には、中世歌人の新出歌を多分に含んでいる可能性が指摘されるのである。

もうひとつの特色は、本集はその大半が題詠歌でしめられているが、そのなかで、正徹の次の

11　人なみにけふはさしでの磯千鳥君が八千代のこゑにひかれて　（正徹・七九八）

の11の詠は、『草根集』（日次本）には「十一月朔日、将軍家にて、源氏物語読進日にて参ぜしに、読おはりて続歌あそばされしに、名所千鳥」（八三二一）と詞書され、『月草』には「享徳二年十一月一日、将軍家にて光源氏物語の読進はて、、廿首続歌侍し時、名所千鳥」（二六九）と詞書される一方、『草根集』（類題本）には「名所千鳥」（五五六二）とするだけなのに（『草根集』『月草』ともに結句を「をしるべに」とする）、本集は「正徹勅勘をめしなをされし後」とするうえ、歌題を欠くというように、詞書の内容に異同が指摘される点に認められよう。この点も、本集の貴重な属性として特筆しうる事柄ではなかろうか。

このようなわけで、本集は改めて検討する価値を十二分にもつ類題集と愚考しうるので、筆者はこのたび、本集の成立の問題を中心にして、いささか検討を試みてみようと企図した次第である。ちなみに、本稿は例によって、蕪雑な作業報告の域を出ぬ代物でしかないが、大方の厳しいご批正を賜りたいと思う。

二　内　容　―歌群構成に関わる諸問題

さて、本集の内容を概観すると、草稿本的性格ないし未定稿の性格が顕著であるように憶測される。それはまず、本集の書誌的形態に窺知されよう。たとえば、

12　涙ほす袖にあまりのうれしさもなをつゝましくあかす夜半哉　（忍逢恋・宗伊・六五六）

13　たのめきてなを逢ことやかぎりなき人の心の奥の海山　（寄海恋・覚胤・六五七）

の12と13の間に十六行の空白が、また、

14　旅人やゆふかげしらむ卯の花をよすがに分る小野丶細道　（夕卯花・為知・一〇二五）

15　霜雪を水上にしてながれをばこほりにむすぶ滝の白糸　（氷留水声・兼右・一〇二六）

の14と15の間に七行分の空白が各々指摘されるのは、本集が形態的にみて不完全な草稿本的な姿を留めている証拠であろう。

次に、本集の内容を精査してみると、福井久蔵氏が『大日本歌書総覧上巻』（昭和四九・五復刻版、国書刊行会）で、「定家雅経より、逍遙院、徹書記、宋世、道堅等の歌を部立なく集めたるもの。」と前述されているように、収載歌が部立構成のもとに整然と配列されるのではなく、各詠歌は各々、小グループを成してはいるものの、編者の統一した配列原理による配列構成にはなっていないようである。すなわち、本集の上巻では、冒頭の一番から三〇番までは「宋世」（雅康）の詠が「早春」から「神祇」まで整然と配列されているが、三一番は「夜燈」題の「雅綱」の詠、続く三二番から三八番までは「新秋」題の「雅親」から「堯孝」までの詠、三九番から五一番までは「七夕」題の「義将」から「昷阿」までの詠、五二番から六三番までは「萩」題の「勝定院」から「道堅」の詠、六四番から六九番までは「荻」題の「普広院」から「常房」までの詠、七〇番から七二番までは「女郎花」題の「祐雅」から「宗伊」までの詠、七三番は「薄」題の「実量」の詠、七四番は「葛」題の「賢盛」の詠という具合で、詠作者でまとまった歌群がある一方、歌題ごとにまとまった歌群もあるなど、その配列の方法は雑多であるといわねばなるまい。

ところで、本集の下巻では和歌の配列はどのようになっているであろうか。下巻の冒頭は七二四番からだが、冒頭の七二四番・七二五番には「鵜川」「蛍」題の「宋雅」（雅縁）の詠が二首配置されている。そして、七二六番から七七一番までは、「霞中滝」から「神祇」題の「光広」の詠が続き、七七二番から七七八番までは、「里竹」（在数）「小日」（長嘯）「山家」（宋世）「寄弓恋」（伊長）「樗」（道永）「関月」（実香）「寄月恋」（公頼）題の詠歌が配

置され、七七九番から七八二番までは「浦雪」題の「公敦」から「中鑑」までの詠、七八三番から七九〇番までは、「神祇」題の「為定女」から「中鑑」までの詠が続くが、この「浦雪」「神祇」題の例歌は同一出典からの抄出であろう。これに続く七九一番から七九七番までは、「寄燈恋」（沢庵）「往事夢」（賢盛）「春鳥」（光広）「元日」（智仁）「歳暮」（弘恵）「立春」（貞徳）「同」（勝俊）の題の詠歌が配置され、続いて七九八番から八〇〇番までは、「正徹勅勘をめしなをされしの後」（正徹）「廿首の哥の奥に」（也足）「或女ねやに梅の匂ひければ、夜更けて」（女）の詞書をもつ三首が連続するが、続く八〇一番から八二五番までは、建久八年七月二十九日の「二百首和歌」から「皈雁」～「橋」題の家隆の二十五首が抄出されている。ここにもまた、本集の上巻に認められたのと同様の和歌配列構成の痕跡が看取され、要するに、本集の内容には未定稿的性格が顕著に窺知されるのである。

それでは、本集に認められる各歌群の出典、典拠はどのようなものであろうか。この問題については、残念ながら、整然たる配列原理をもたない混態の様相を呈している本集自体の有する和歌配列の問題のうえに、現時点での筆者の手による調査では容易に解決できそうにない難題であるので、その完全な追究は不可能といわねばなるまいが、あえて本集における各小集団歌群の実態を整理するならば、おおよそ次のごとくなるであろう。

上巻

〔一〕　一～三〇（宋世〈雅康〉の歌群）

〔二〕　三一～一〇〇（新続古今時代の歌人による、夜秋・新秋・七夕・萩・荻・女郎花・薄・葛・秋野・鷹狩〈例外〉・秋田・初雁・鹿・霧・駒迎・月・虫・擣衣・紅葉など、秋題の歌群）

〔三〕　一〇一～一四〇（新続古今時代の歌人による、初冬・時雨・落葉・霰・雪・氷・寒芦・冬月・千鳥・水鳥・鷹狩・炉火・神楽・歳暮など、冬題の歌群）

〔四〕　一四一～一四四（不明、室町中後期の歌人による歌群）

〔五〕　一四五～一七三（宋世の「詠花鳥和哥」の歌群〈冒頭の五首は除く〉）
〔六〕　一七四（不明、牡丹花〈肖柏〉の十五夜月の題詠）
〔七〕　一七五～一八四（元信の歌群）
〔八〕　一八五～二六四（後花園院の時代から後奈良院ごろの歌人による歌群）
〔九〕　二六五～二七〇（雅親の歌群）
〔一〇〕二七一～二七四（心敬の歌群）
〔一一〕二七五（不明、実隆の授記品の題詠）
〔一二〕二七六～二八一（正徹の歌群〈二七九は除く〉）
〔一三〕二八二～二八六（宋世の歌群）
〔一四〕二八七～三〇八（新続古今時代の歌人による歌群）
〔一五〕三〇九～三一五（堯孝の歌群）
〔一六〕三一六～三四三（新続古今時代前後の歌人による歌群）
〔一七〕三四四～三五〇（常房の七夕の結題の歌群）
〔一八〕三五一～三六五（新続古今時代前後の歌人による歌群）
〔一九〕三六六～四〇〇（道堅・実隆〈実世は誤り〉の名所百首和歌の歌群）
〔二〇〕四〇一～四二三（雅経の千五百番歌合の歌群）
〔二一〕四二四～四三二（宋世・実隆・教国の歌群）
〔二二〕四三三～五一六・六六六～六七九（兼成の百首歌の歌群）
〔二三〕五一七～五三八（恵空〈邦高親王〉の詠三十首和歌の歌群）

〔二四〕五三九～五九八（後柏原院時代の歌人による歌群）
〔二五〕五九九～六五六（文明十三年十一月二十日三十番歌合の歌群）
〔二六〕六五七～六六五・六八〇～七二三（後奈良院時代前後の歌人による歌群）

下巻

〔二七〕七二四～七二五（宋雅〈雅縁〉の歌群）
〔二八〕七二六～七七一（光広の春部～雑部の歌群）
〔二九〕七七二～七七八（永禄ごろの歌人による歌群）
〔三〇〕七七九～七九〇（永正ごろの歌人による浦雪・神祇題の歌群）
〔三一〕七九一～七九七（江戸初期の歌人による歌群）
〔三二〕七九八～八〇〇（正徹・也足〈通勝〉・女による実詠歌群）
〔三三〕八〇一～八二五（家隆の春部～雑部の歌群）
〔三四〕八二六～八三九（後花園院の時代から後奈良院ごろの歌人による歌群）
〔三五〕八四〇～八四五（雅親の詠歌群）
〔三六〕八四六～八六三（後小松院から江戸初期ごろまでの歌人による歌群）
〔三七〕八六四～八七〇（宋世の七夕の結題の歌群）
〔三八〕八七一～八七七（後奈良院ごろの歌人による歌群）
〔三九〕八七八～八八七（後醍醐院から方仁〈正親町天皇〉までの皇室関係者による歌群）
〔四〇〕八八八～八九四（伏見宮家の人びとによる歌群）
〔四一〕八九五～九六一（近衛・九条・二条・一条以下、主に公卿による歌群）

〔四二〕九六二～九七八（承道法親王以下の僧侶歌人による歌群）
〔四三〕九七九～九八五（祐夏・祐守の賀茂神社の禰宜による歌群）
〔四四〕九八六～一〇三八（持明院・花山院・小倉・細川・姉小路など、室町後期から江戸初期の歌人による歌群）
〔四五〕一〇三九～一〇四五（道堅など武家出身の歌人による歌群）
〔四六〕一〇四六～一一二七（後花園院から正親町院ごろまでの歌人による歌群）
〔四七〕一一二八～一一三七（公条の月の結題による歌群）
〔四八〕一一三八～一一四一（柳江・氏信・師兼・元信による歌群）
〔四九〕一一四二～一一六一（飛鳥井家二十首続歌〈永享十年九月十三夜当座〉の歌群）
〔五〇〕一一六二～一二〇六（承応三年九月十三夜同詠三首応製和歌〈夕月・暁月・夜恋〉の歌群）
〔五一〕一二〇七～一二〇九（光広・実隆の歌群）
〔五二〕一二一〇～一二一九（天正五年親王家五十首の歌群）
〔五三〕一二二〇～一二二四（光広の歌群）
〔五四〕一二二五～一二六八（後花園院の時代から江戸初期ごろの歌人による歌群）
〔五五〕一二六九～一二八四（後花園院の歌群）
〔五六〕一二八五（不明、竹〈誠仁親王か〉寄莚恋の題詠）
〔五七〕一二八六～一二九五（知仁〈後奈良天皇〉の歌群）
〔五八〕一二九六～一三二八（後花園院の時代から江戸初期ごろの歌人による歌群）

以上が本集の和歌配列における各詠歌群のおおまかな整理だが、この整理によって、比較的明確に指摘できるのは、各歌群がある特定の個人の歌人による詠歌群と、単独ないし複数の歌人による歌会歌、続歌、定数歌、歌合な

どの作品名を特定しうる詠歌群の二種類に分類される、本集の編者の編集方針の痕跡であろう。ちなみに、前者の場合、作品名を特定しうる場合もあるが、それ以外は、おおまかにいえば、本集の各歌群は、ほぼ同時代の歌人の詠歌が連続して配列されたり、あるいは、社会的な地位・身分などによる階層集団の種類分けによって配列されているような配列状況である。

具体的にいうならば、本集は、まず特定の歌人では、

A、宋世（飛鳥井雅康、一四三六～一五〇九、七十四歳）〔一・五・一三・三七〕
B、武田元信（生年不詳～一五二一、五十歳頃）〔七〕
C、飛鳥井雅親（一四一七～一四九〇、七十四歳）〔九・三五〕
D、心敬（一四〇六～一四七五、七十歳）〔一〇〕
E、正徹（一三八一～一四五九、七十九歳）〔一二〕
F、堯孝（一三九一～一四五五、六十五歳）〔一五〕
G、飯尾常房（不詳、寛正・文明ごろ活躍）〔一七〕
H、烏丸光広（一五七九～一六三八、六十歳）〔二八・五三〕
I、藤原家隆（一一五八～一二三七、八十歳）〔三三〕
J、三条西公条（一四八七～一五六三、七十七歳）〔四七〕
K、後花園院（一四一九～一四七〇、五十二歳）〔五五〕
L、知仁親王（後奈良天皇、一四九六～一五五八、六十二歳）〔五七〕

のような歌人による歌群が散在するという構成になっている。これを年代的に連続させてみると、新古今時代のIの藤原家隆の歌群がもっとも古く、次いで、室町中期に活躍したEの正徹・Fの堯孝・Dの心敬・Kの後花園院・

Cの飛鳥井雅親・Gの飯尾常房・Aの飛鳥井雅康などの歌群が連続し、さらに、室町後期のBの武田元信・Lの後奈良天皇・Jの三条西公条などの歌群が続き、最後に、江戸初期のHの烏丸光広の歌群が連続して完結するという構成になっているといえるであろう。

次に、出典を特定しうる作品名（典拠）の視点から、本集をみると、

a、「詠花鳥和哥」（宋世〈飛鳥井雅康〉）〔五〕

b、「名所百首和歌」（道堅・実隆〈実世とあるのは誤り〉）〔一九〕

c、「千五百番歌合」（飛鳥井雅経）〔二〇〕

d、「詠百首和歌」（水無瀬兼成）〔二二〕

e、「詠三十首和歌」（恵空〈邦高親王〉）〔二三〕

f、「文明十三年十一月二十日三十番歌合」（足利義尚・上冷泉為富・甘露寺親長・飛鳥井雅康・正親町三条公躬・海住山高清・姉小路基綱・上冷泉為広・三条西実隆・高倉永継・細川政国・杉原宗伊・星野政茂・河内頼行・二階堂政行・伊勢貞頼・一色政凞・垰和元為・大館重信・武田玄就）〔二五〕

g、「飛鳥井家二十首続歌〈永享十年九月十三夜当座〉」（飛鳥井雅世・堯孝・飛鳥井雅永・同雅親・政法〈誤りか〉）〔四九〕

h、「正応三年九月十三夜同詠三首応製和歌」（持明院・近衛家基・洞院公守・日野資宣・二条為世・平経親〈「資」は誤り〉・九条隆博・坊城俊定〈「宣」は誤り〉・京極為兼・一条冬良・五条為実・二条為道・藤原家親・世尊寺定成・九条隆教）〔五〇〕

i、「天正五年親王家五十首〈四月～十一月の間〉」（竹〈誠仁親王〉）〔五二〕

のごとき出典資料が散在して収載されていることが知られる。これらの出典を時代的に古い順序に整理すると、ま

ず、建仁元年（一二〇一）六月の詠進と推測されるcの「千五百番歌合」から始まって、次いで、hの「正応三年（一二九〇）九月十三夜同詠三首応製和歌」が続き、さらに、gの「飛鳥井家二十首続歌〈永享十年（一四三八）九月十三夜当座〉」が続いて、それにfの「文明十三年（一四八一）十一月二十日三十番歌合」と、詠作年時は分明でないが、法名の「宋世」から文明十四年（一四八二）以降の成立と憶測されるaの「詠花鳥和哥」とが連続し、次いで、永正十年（一五一三）正月二十日の成立とおぼしきbの「名所百首和歌」と、大永四年（一五二四）の冬から翌年の夏にかけて北野社に奉納されたらしいeの「詠三十首和歌」がきて、最後に、iの「天正五年（一五七七）親王家五十首」と、文禄二年（一五九三）五月二十日からの宮中着到和歌であるdの「詠百首和歌」とが接続するという構成である。

要するに、この場合も、特定の個人による詠歌群の場合と同様に、新古今時代の歌人の出典資料から始まって、室町中期に成立の定数歌がそれに続き、室町後期（戦国時代）の歌会歌に終っているが、江戸初期の特定の歌集が見出せないのが多少の異同といえようか。

なお、このほかの各歌群については、皇室関係の歌人による歌群〔三九〕・伏見宮家関係の歌人による歌群〔四〇〕・公家（廷臣）歌人による歌群〔四一・四四〕・僧侶歌人による歌群〔四二〕・神社関係の歌人による歌群〔四三〕・武家出身の歌人による歌群〔四五〕など、社会的な地位・身分による階層集団による歌群形成の痕跡が認められるが、それ以外では、主として詠歌歌人の属する時代の歌壇史的集団による歌群形成の跡が顕著であるように憶測される。すなわち、〔二・三〕は後花園天皇から後奈良天皇ごろの歌人による歌群、〔四〕は後花園天皇・後土御門天皇ごろの歌人による歌群、〔六〕は後土御門天皇時代の歌人の歌、〔八・一一・二一・三二・三四〕は後花園天皇から後奈良天皇ごろの歌人による歌群、〔一四・五八〕は後花園天皇から後陽成天皇ごろの歌人による歌群、〔一六〕は後醍醐天皇から後土御門天皇ごろの歌人による歌群、〔一八〕は後花園天皇から後柏原天皇ごろの歌

人による歌群、〔二四・三〇〕は後柏原天皇時代の歌人による歌群、〔二六〕は後柏原天皇・後奈良天皇ごろの歌人による歌群、〔二七〕は後小松天皇時代の歌人による歌群、〔二九〕は後柏原天皇から正親町天皇ごろの歌人による歌群、〔三一〕は後柏原天皇から後水尾天皇ごろの歌人による歌群、〔三六〕は後小松天皇から後水尾天皇ごろの歌人による歌群、〔三八〕は後奈良天皇時代の歌人による歌群、〔四三〕は後醍醐天皇から後陽成天皇ごろの歌人による歌群、〔四六・五四〕は後花園天皇から正親町天皇ごろの歌人による歌群、〔四八〕は後醍醐天皇から後柏原天皇ごろの歌人による歌群、〔五一〕は後花園天皇から後水尾天皇ごろの歌人による歌群、〔五六〕は正親町天皇時代の歌人の歌のとおりである。

以上を要するに、本集は新古今時代から、鎌倉時代後期、南北朝時代、室町時代を経て、江戸時代初期ごろまでの歌人による題詠歌と実詠歌を集成した類題集ということになろうが、この問題については、次節で総合的に言及したいと思う。

三　詠歌作者の問題

それでは、本集に収載される詠歌の作者はどのような歌人であろうか。この問題については、前節でもかなり詳細に言及したが、ここで改めて全体的に論じるならば、本集には、実態不明の歌人や、「実世」（三八〇～四〇〇）と作者表記されてはいるものの、実は「実隆」の誤記であるなど、不備な記述もまま指摘されるので、完全無欠な実態は把握しがたいといわねばなるまいが、現時点で把握しえた調査の範囲内で報告をすれば、次のとおりである。

次頁の（表1）は、本集の詠歌作者の傾向を把握する手掛りとして、五首以上の収載歌人を整理、一覧したものである。

（表1）本集に五首以上収載される歌人一覧表

作者	歌数
兼成	一〇〇首
雅康（宋世）	九九首
光広	五五首
実隆（堯空）	五三首
道堅	三九首
堯孝	三四首
雅親（栄雅）	二九首
正徹	二八首
邦高親王（恵空）	二七首
雅経	二五首
家隆	二五首
後花園天皇	二三首
後奈良天皇（知仁）	二三首
公条（仍覚・称名院）	一九首
雅世	一四首

作者	歌数
誠仁親王	一三首
元信	一二首
兼良	一〇首
賢盛（宗伊）	一〇首
雅縁（宋雅）	九首
雅永（浄空）	九首
冬良	八首
雅俊	八首
為広（宗清）	八首
常房	八首
教房	八首
祐夏	七首
実量	七首
元長	七首
祐雅	七首

作者	歌数
祐守	六首
持為	六首
常縁	六首
為富	六首
政為	六首
元盛	六首
基氏	五首
為重	五首
親長（蓮空）	五首
後柏原天皇（勝仁）	五首
伊長	五首
昆阿	五首
合計	七九〇首

この（表1）によれば、本集の総歌千三百二十八首のうち、五首以上の歌人をしめる割合は五十九・五パーセン

トになり、ほぼ六割の占有率であることが知られよう。そこで、本集の詠歌作者の全体的傾向について、この（表1）によって示すならば、本集は時代的には、新古今時代の歌人のうち、藤原家隆（一一五八～一二三七）と飛鳥井雅経（一一七〇～一二二一）の両名がまず登場し、このうち、後者の飛鳥井家の歌人については、続いて室町時代の雅康（宋世、一四三六～一五〇九）、雅親（栄雅、一四一七～一四九〇）、雅世（一三九〇～一四五二）、雅縁（宋雅、一三五八～一四二八）、雅永（浄空、生没年不詳）、雅俊（一四六一～一五二三）などが歌数順に登場する。一方、前者の家隆の後続は断絶するが、室町時代前期では、正徹（一三八一～一四五九）、堯孝（一三九一～一四五五）が登場するなか、その堯孝に口伝を受け、『新続古今集』の寄人となって撰者飛鳥井雅世に協力、後花園天皇（一四一九～一四七〇）を軸とする宮廷歌壇で活躍した三条西公保（一首収載）、その家督を嗣いだ次男・実隆（一四五五～一五三七）などの三条西家の歌人では、さらに実隆の子息の公条が続き、その公条の次男で水無瀬英兼の嗣となって水無瀬家を嗣いだ同兼成（一五一四～一六〇二）が、第一位になっているのは特筆されよう。同時に、後崇光院（貞成親王）の第一皇子であった後花園天皇の宮廷歌壇では、伏見宮家の邦高親王（一四五六～一五三二）、貞常親王（四首収載）・貞教親王（同）などが登場している。その後の宮廷歌壇では、実隆と親交のあった道堅（生年不詳～一五三二）、実隆・公条に『古今集』や『源氏物語』の講義を受けた後奈良天皇（一四九六～一五五七）、後奈良天皇の第一皇子であった正親町天皇（一首収載）の第一皇子誠仁親王（一五五二～一五八六）などが陸続している。また、実隆関係では、『三玉集』の下冷泉政為（一四四五～一五二三）と後柏原院（一四六四～一五二三）が登場する。ちなみに、下冷泉政為と並称された上冷泉為広（一四五〇～一五二六）と、その父・為富（一四二五～一四九七）も登場している。また、当代では、『新続古今集』の仮名・真名序を草した、室町時代を代表する碩学一条兼良（一四〇二～一四八一）をはじめとする一条家の歌人も登場し、兼良の子息・教房（一四二三～一四八〇）、冬良（一四六四～一五一四）なども花を添えている。なお、江戸時代初期にあって、後陽成

天皇・後水尾天皇の二代にわたって、中院通勝（四首収載）・三条西実条（二首収載）らとともに宮廷文化人グループの代表的存在であった、烏丸光広（一五七五～一六三八）が、第三位に入っているのは異彩を放っているといえようか。

要するに、（表1）からみれば、本集の詠歌歌人では、新古今時代の家隆・雅経の二歌人から始まるが、その大半は室町時代の歌人でほぼ占有され、それに少数の江戸時代初期ごろまでの歌人が加わるという傾向が窺知されよう。そのなかで、あえて言うならば、三条西家、飛鳥井家、伏見宮家関係の歌人がめだつ存在である点に、本集の属性を認めることができようか。

なお、本集に収載される四首以下の詠作者は、以下のとおりであるが、次の二首は、破損と判読不明の理由で、その個人名を特定しえない。

16　歳せめて一夜の空に飛鳥の翅もいそぐあすの春哉　（歳暮・□□・七九五）

17　つみにめでいく春秋のおもひ草露を袂にかけぬ日もなし　（久恋・□阿・九八六）

〔四首収載歌人〕　為世・玄就・実雅・守快・勝光・肖柏・心敬・通勝（素然・也足）・貞常親王・貞敦親王・道永・頼行

〔三首収載歌人〕　為兼・為実・為親・為道・為右・永基・永継・家基・家親・覚助法親王・季経・義尚・義政・経資・慶運・元為・公躬・公守・公雄（頓覚）・高清・恒明親王・済継・氏真（宗閤）・資宣・持明院・持和・実遠・実枝（実世）・実仲・重治・俊宣・尚通・政家・政国・宣秀・尊応・尊氏（等持院）・定成・冬康・満意・隆教・隆博・龍霄

〔二首収載歌人〕　為遠・為孝・為仲・為忠・為冬・為頼・惟房・永宣・永相・雅遠・雅行・雅綱・雅藤・覚恵・基孝・教国・教親・教長・堯尋・経乗・兼孝・兼載・兼秀・顕長・元泉・言継・言国・公音・公

綱・公順・公澄・公敦・公頼・綱光・後土御門天皇・資任・実教・実条・実任・実右・秀房・重信・重親・重保・俊量・尚顕・承道法親王・浄弁・稙家・勝秀・親当・正韵・政凞・政顕・政行・政嗣・政茂・清超・宣親・前久（龍山）・智仁親王・中鑑・通光・通秀・貞頼・通灌・任円・幽斎（藤孝）・隆永・隆康・了俊（貞世）・良誉

〔一首収載歌人〕　為尹・為衡・為氏・為数・為定・為定女・為豊・為良・為和・伊俊・尹豊・尹賢・永慶・永行・永孝・円空・遠村・遠忠・応全・奥憲・呆守・雅胤・雅教・雅業・雅枝・雅春・雅章・雅陳・雅敦・雅庸・覚胤・覚円・洪仙・季遠・季継・季種・季春・基定・基富・義教（普広院）・義嗣・義持・義俊・義将・匡遠・教秀・教忠・堯孝女・経卿・経頼・慶親・兼賀・賢房・顕春・言綱・弘恵・公維・公允・公益・公遠・公兼・公松・公助・公縄・公宣・公保・公右・公誉・光慶・光康・光泰・光明院・行康・行二・孝盛・高国・高政・興意・興致・国光・後小松天皇・後醍醐天皇・済俊・歳阿・在数・氏信・氏房・師兼・師賢・資将・持季・持賢・持元・持政・持頼・時阿・実顕・実香・実淳・実澄・実通・実福・実連・守光・秀行・重光・重通・諸仲・俊顕・俊直・俊治・女・尚道・称光院・昌叱・勝俊・勝定院・常安・常胤・常勲・常照・信尚・信輔・親元・親孝・親綱・親俊・親世・仁悟・尋雅・正広・正晃・正頼・成賢・政胤・政基・政賢・政春・政法・盛秋・盛長・清範・晴通・静覚・専順・宣綱・詮平・素欣・宗鑑・宗祇・宗綱・宗砌・宋順・尊海・尊純・泰仲・沢庵・智薀・智楽・長賢・長嘯子・長晴・珍阿・通胤・通村・通博・定仲・貞秀・貞親・貞盛・貞徳・貞隆・冬平・等貴・統秋・頓阿・敦通・道喜・道什・範久・範政・毗親・輔房・法守法親王・邦房親王・満元・満祐（性真）・有元・有親・頼継・頼之・立承・柳江・隆重・隆富・良恕・量光・和氏・和長

四　歌題の問題

ところで、本集が和歌を整然と部立別に配列構成した類題集ではなく、言わば雑纂形態による類題集である点については前述したとおりだが、それでは、本集に収録される歌題はどのようなものであろうか。本集には、少数だが実詠歌も含まれているので、ここでは題詠歌に限って、歌題の問題について、以下言及しておこう。

そこで本集の歌題のすべてについて、慶安三年（一六五〇）の刊行になる版本『明題部類抄』を参考にして調査、検討した結果は、おおよそ次のとおりだが、その際、本集における歌題の頻度や、通常の類題集における歌題の配列順序・構成原理などは、本集に収録される歌題の配列がアト・ランダムであるので踏襲せず、各部立別の歌題や配列は五十音順にして配列したのみの、安易な配列方法による不体裁な結果になったことを、断っておきたいと思う。

〔春部〕蛙・雲雀・○越山見花・遠帰鴈・遠尋花・簷梅・鶯・○河柳・花・花下忘帰・○花光契万年・花交松・花手向・○花色・○花方盛・○花未遍・霞・○霞間月・○霞始聳・霞中花・○霞中滝・海霞・海辺霞・款冬・○岸藤・岸柳・○厳残雪・○厳上躑躅・帰雁・○羇中花・○磯春花・○去鴈遙・○暁更梅・○暁梅・蕨・見花・○元日・○原若菜・○古砌款冬・行路柳・○江春月・○江上暮春・○谷底残雪・○三月・○三月三日・三月尽・○三月尽山・○山花・○山花盛・山霞・山寒花遅・○山路尋花・残雪・子日・糸桜・○二月・社頭花・○樹陰蕨・○春・春駒・春月・○春日遅々・○春鳥・春欲暮・初鶯・初花・初春・初春鶯・○津梅・尋花・○山辺落花・○正月・○夕雲雀・夕鶯・○夕梅・雪中梅・早蕨・○早春・○早春霞・○早春湖・挿頭花・○沢春草・○待鶯・待花・○池花・朝花・○庭菫菜・○庭上梅・

○田蛙・○田若菜・○杜霞・都初春・藤・○独見花・年内立春・梅・○梅薫枕・梅香留袖・○梅有天下栄・○白梅盛・浦霞・暮春・○暮春月・○峰帰鴈・○牧春駒・○名所鶯・夜梅・○野雲雀・野霞・○野外朝霞・○野雉・○野辺霞・落花・○落花入簷・落花埋路・○里梅・柳・○柳垂糸・○柳弁春・柳露・○旅宿春月・○凌霞尋花・立春・○立春風・○嶺花・○滝花

〔夏部〕雨後鵜川・簷菖蒲・卯花・卯花盛・夏・夏衣・夏橋・夏月・夏月涼・夏草・夏朝・夏鵜・夏天・夏祓・夏夜・夏鷹・苅菖蒲・郭公・郭公一声・郭公稀・郭公数声・郭公幽・郭公欲帰・澗底雪・葵・橘・橘薫枕・橘蛍・渓卯花・五月雨・五月雨久・湖郭公・荒和祓・祭後葵・採早苗・山葵・市郭公・四月・社頭橘・霍公・首夏・首夏藤・樹陰納涼・袖上菖蒲・曙郭公・菖蒲・照射・常夏鵜川・新樹・山辺納涼・夕卯花・夕顔露・夕立・夕立風・惜時鳥・泉・蟬・早苗・早苗多・早苗至・沢蛍・待郭公・湊夕立・池菖蒲・遅桜・樗・朝早苗・鵜川・躑躅紅・杜首夏・杜蟬・嶋夏草・氷室・蚊遣火・聞郭公・聞時鳥・名所夏月・野時鳥・野夕立・余花・瀬鵜河・里郭公・里夕顔・籬菊・蓬・路卯・廬橘・六月祓

〔秋部〕雨後草花・遠郷鴈・黄葉・河月・河紅葉・河上月・河上朝霧・鹿・鹿声為友・海辺鹿・海辺月・葛・閑中月・閑庭薄・関月・関歳暮・関路鴈・関路月・雁・翫月・羇中嵐・菊・九月尽・弓張月・橋月・橋上月・暁月・槿・駒迎・蛍・蛍過窓・閨中月・月・月契秋・月前遠鐘・月前鹿・月前観空・月前雁・月前菊・月前孤舟・月前紅葉・月前浅茅・月前秋・月前萩・月前秋風・月前鐘・月前草花・月前竹風・月前虫・月前枕・月前擣衣・月前聞鹿・月前扁舟・月前浦・月前霧・月前野・月前幽情・見月・湖月似氷・湖上月・岡鹿・岡初秋・庚申七夕・紅葉・山家月・山家荻・山居荻・山月・山月初昇・山夕月・残月掛峰・残暑・鴫・舟中月・秋・秋雲・秋時雨・秋夕・秋夕雨・秋夕傷心・秋鳥・秋田・秋夜・秋野・萩・萩露・十五夜・十五夜月・重陽・初雁・初秋夕風・女郎花・女郎花鵲・織女契久・深山紅葉・新

秋・尋虫・尋虫声・水辺菊・七夕・七夕雲・七夕河・七夕居所・七夕言志・七夕後朝・七夕山・七夕雑物・七夕夜・七夕植物・七夕神祇・七夕人事・七夕地儀・七夕天象・七夕動物・七夕風・七夕旅・七夕露・夕月・夕虫・惜月・早秋・草花露・杣鹿・沢鳴・沢辺鳴・待月・待七夕・竹間月・竹露・虫・虫怨・蔦紅葉・荻・杜紅葉・擣衣・南北擣衣・薄・薄鶉・半出月・伴菊延齢・風前薄・浦月・暮秋霜・暮秋鳥宿・豊明節会・霧・霧中初雁・名所擣衣・明月如昼・八月十五夜・夜荻・夜聞荻・野月・野虫・籬菊・鈴虫・露・鹿声添霧・鹿鳴草初雁

〔冬部〕鴨・河氷・檜雪・海辺冬月・海辺冬鶴・閑中雪・寒月・寒草虫吟・寒夜月・寒芦・関路雪・寄鏡神楽・橋上雪・橋落葉・暁千鳥・月前時雨・月前神楽・古郷雪・枯野朝・故郷雪・湖雪・湖氷・向炉火・江寒芦・谷音氷・歳暮・歳暮近・杉雪・山初冬・霰・霰妨夢・残鴈・残菊・残菊鶴・残菊匂・時雨・時雨雲・時雨過・初冬・初冬時雨・初冬朝・初冬風・除夜・枯蒲・松雪・篠雪・神楽・深夜千鳥・水鳥・惜歳暮・雪・雪中厭人・積雪・千鳥・早梅水鳥・沢水鳥・待雪・炭竈・池水鳥・竹霰・竹雪深・朝寒芦・庭霜・杜時雨・都歳暮・冬・冬款冬・冬月・冬日・冬色・冬夕風・冬草・冬地儀・枇杷・氷・氷初結・氷留水声・風前落葉・浦雪・暮里神楽・網代・野亭雪・鷹狩・落葉・落葉深・落葉満染・里雪・嶺雪

〔恋部〕依忍増恋・怨恋・厭恋・夏恋・過不逢恋・俄逢恋・会恋・悔恋・隔遠路恋・祈恋・祈不会恋・祈逢恋・寄衣恋・寄雨恋・寄雲恋・寄莚恋・寄煙恋・寄花恋・寄花契恋・寄花待恋・寄河恋・寄海恋・寄絵恋・寄菅恋・寄弓恋・寄橋恋・寄鏡恋・寄玉恋・寄琴恋・寄月恋・寄月顕恋・寄月切恋・寄月忘恋・寄犬恋・寄原恋・寄虎恋・寄午向恋・寄岡恋・寄浅茅恋・寄山恋・寄糸恋・寄時雨恋・寄日恋・寄蛛恋・寄床恋・寄松恋・寄秋露恋・寄星恋・寄硯恋・寄潟恋・寄草恋・寄湊恋・寄竹恋・寄虫恋・寄鳥恋・寄

枕恋・寄天恋・寄田恋・寄杜恋・寄燈恋・寄風恋・寄浦恋・寄蓬恋・寄忘草恋・寄木恋・寄門恋・寄夜恋・寄野恋・寄里恋・寄露恋・寄滝恋・稀恋・稀逢恋・稀問恋・疑真偽恋・久恋・旧恋・近恋・遇不逢恋・経年祈恋・月前恨恋・月前逢恋・見恋・後朝恋・恨恋・恨絶恋・思不言恋・春聞恋・馴恋・馴不逢恋・初逢恋・深更逢恋・尋恋・七夕恋・絶恋・増恋・待恋・待空恋・通書恋・適逢恋・伝言恋・途中契恋・冬恋・恋・忍恋・忍逢恋・白地恋・被忘恋・不見恋・不憑恋・聞恋・聞声恋・別恋・返書恋・変恋・逢恋・逢不会恋・忘恋・夜恋・欲無名恋・旅恋・恋・恋植物

〔雑部〕雲・塩屋烟・猿・煙・簷忍草・往事渺茫・往事夢・夏旅・海・海辺眺望・懐旧・関・関路雲・寄月懐旧・寄松祝・寄筏述懐・寄道慶賀・寄道祝・寄夢懐旧・寄夢無常・羇旅・橋・暁・暁雲・暁述懐・琴・月前河・月前述懐・月前旅・見花無常・見月岡旅・硯・古郷雨・古寺鐘・古寺嵐・古寺夕嵐・古寺滝・虎・湖辺眺望・栽松為友・雑・雑人事・山家・山家夜雨・山家嵐・山館烟・山村烟・山路眺望・紙・試筆・寺近聞鐘・社頭祝言・祝言・述懐・初春祝言・書・松・松作友・松有佳色・松歴年・鐘・神祇・瑞籬・餞別・窓燈・苔・竹・鳥・眺望日晩・眺望日暮・田・田家・田家鳥・田里夕煙・杜杉・馬・薄暮雲・薄暮烟・筆・風・仏・仏寺・浦舟・浦松・無常・夢・名所鶴・名所野・夜燈・野風・里竹・旅・旅行・旅宿・旅宿夢・漁舟速波・老人馴月・老惜月・滝・〈釈教〉釈教・観音品・厳王品・授記品・〈歌枕〉安達原・宇津山・桂里・三室山・吹飯浦・石清水・富士・木曽懸橋・嵐山・（春）音羽川・玉嶋川・宇津山・末松山・葛城山・志賀花園・三嶋江・塩竈・吹上浜・湊川・大淀・田籠浦・（夏）大井川・篠田森（信太杜）・伊香保・天香具山・難波江・（秋）泊瀬山（初瀬山）・龍田山・宮城野・小倉山・宇治川・武蔵野・清見関・（冬）鏡山・浮島原・（恋）名取川・瀬田橋・（雑）飛鳥川・長柄橋・生浦・芳野河・角田川

以上、本集に収録される歌題のすべてを整理・一覧したが、数的には、春部百二十六題、夏部八十八題、秋部百五十八題、冬部八十八題、恋部百二十三題、雑部百四十五題の総計七百二十八題のとおりである。ちなみに、本集の歌題数を、春部に限ってのみではあるが、江戸期の成立になる『明題和歌全集』と比較してみると、『明題和歌全集』が春部の歌題を四百七十六題を収録するのに対し、本集は百二十六題であるわけだから、本集の歌題数は『明題和歌全集』の二十六・五パーセントにしかすぎず、けっして多いとはいえないであろう。しかし、両者の歌題の重複例をみると、意外にその数は少ないのだ。春部のみだが歌題に○印を付しているのは、実は『明題和歌全集』の歌題とは重複しない、本集だけが収載する独自の歌題を意味している。百二十六題のうち、七十一題が本集独自の歌題というわけだから、これは五十六・三パーセントにあたり、本集の歌題収載の実態はかなり個性的だと評してもそれほど言い過ぎではあるまい。

となると、本集は歌題の収載面からみると、かなりユニークな類題集となるが、それでは、『明題和歌全集』と重複しない本集の五十六・三パーセントにも及ぶ歌題の実態は何を意味するのであろうか。それは一言でいえば、『明題和歌全集』の収録する歌題とは何かということになろう。ちなみに、『明題和歌全集』の内容は拙著『中世類題集の研究』（平成六・一、和泉書院）によれば、勅撰集では『新続古今集』が最新の典拠であり、そのほかのものでは「文安三年七月内裏続歌」が最初の資料であるから、『明題和歌全集』の歌題は文安三年（一四四四）三月までに案出された歌題ということになる。ということは、本集の歌題の大半が『明題和歌全集』のそれと重複しないのは、文安三年以降に考案された歌題を収載しているからだということを意味しよう。この推断は、さきに本集の収載歌と詠歌作者とが室町中・後期以降のそれが基幹になっていると結論づけたことと軌を一にする事象であって、ここに、本集が歌題の側面からみても、室町中・後期以降の歌壇、もしくは和歌の詠作状況を、如実に反映した類題集であるということが証明されるであろう。

五　成立時期の問題

それでは、本集の成立時期は何時であろうか。この問題については、出典面からみると、現時点では、「天正五年親王家五十首」（i）と、文禄二年五月の宮中着到和歌である「詠百首和歌」（d）とが最新の資料と確認されるので、前者が天正五年（一五七七）の成立、後者が文禄二年（一五九三）五月二十日の成立であることから、本集の成立時期は文禄二年五月二十一日以降と、一応なろう。

ところが、詠歌作者の視点からみると、葉室顕長のように、文禄二年以降に誕生した人物も本集には入集しているので、その成立時期はもう少しさがると言わねばなるまい。そこで本集に収録された詠歌作者のうち、室町後期ごろに誕生し、江戸初期ごろに逝去した人物を、没年順に以下に列挙すれば、おおよそ次のごとくなる。

水無瀬兼成　永正二年（一五一四）～慶長七年（一六〇二）、八十九歳。
高倉永孝　永禄三年（一五六〇）～慶長十二年（一六〇七）、四十八歳。
中院通勝　弘治二年（一五五六）～慶長十五年（一六一〇）、五十五歳。
持明院基孝　永正十七年（一五二〇）～慶長十六年（一六一一）、九十二歳。
今川氏真　天文七年（一五三八）～慶長十九年（一六一四）、七十七歳。
近衛信輔　永禄八年（一五六五）～慶長十九年（一六一四）、五十歳。
飛鳥井雅庸　永禄十二年（一五六九）～元和元年（一六一五）、四十七歳。
六条有親　永禄七年（一五六四）～元和二年（一六一六）、五十三歳。
大炊御門経頼　弘治元年（一五五五）～元和三年（一六一七）、六十三歳。

上冷泉為頼　文禄元年（一五九二）～寛永四年（一六二七）、三十六歳。
日野光慶　天正十九年（一五九一）～寛永七年（一六三〇）、四十歳。
烏丸光広　天正七年（一五七九）～寛永十五年（一六三八）、六十歳。
四辻季継　天正九年（一五八一）～寛永十六年（一六三九）、五十九歳。
三条西実条　天正三年（一五七五）～寛永十七年（一六四〇）、六十六歳。
沢庵　天正元年（一五七三）～正保二年（一六四五）、七十三歳。
木下長嘯子　永禄十二年（一五六九）～慶安二年（一六四九）、八十一歳。
松永貞徳　元亀二年（一五七一）～承応二年（一六五三）、八十三歳。
中院通村　天正十六年（一五八八）～承応二年（一六五三）、六十六歳。
白川雅陳　文禄元年（一五九二）～寛文三年（一六六三）、七十二歳。
清水谷実任　天正十五年（一五八七）～寛文四年（一六六四）、七十八歳。
高倉永慶　天正十九年（一五九一）～寛文四年（一六六四）、七十四歳。
葉室顕長　元和元年（一六一五）～延宝三年（一六七五）、六十一歳。
堤貞秀　元和元年（一六一五）～延宝五年（一六七七）、六十三歳。
飛鳥井雅章　慶長十六年（一六一一）～延宝七年（一六七九）、六十九歳。

以上、本集に収載される最新の詠歌歌人の生没年を整理、一覧したが、この整理によって本集の成立年時を想定するならば、理論的には、葉室顕長と堤貞秀の生年である元和元年（一六一五）から、飛鳥井雅章の没年である延宝七年（一六七九）までということになろう。ちなみに、これらの三人の本集に収載される詠歌は、

18　山河にながるゝ花をせき入てを田の蛙もこゑ匂ふなり　（田蛙・雅章・八五五）

19　いつはりとえこそうらみね行末を契りし人に今夜問はれて　（俄逢恋・貞秀・八五九）

20　秋をうしとなきつゝわたるかりがねの涙や小田の露とちるらん　（秋田・顕長・一〇二九）

21　山陰にかぜの吹しくゆふ烟下にむせぶや思ひなるらむ　（寄煙恋・同・一二六一）

の18～21の四首であるが、残念ながらこれらの四首を収載する歌集を見出しえない。そこで、詠歌作者の視点から想定される、元和元年（一六一五）から延宝七年（一六七九）までの本集の成立時期を、もう少し狭める手掛りはないか、調査を進めてみると、次の

22　ひける野のねの日の小松やどにうへてちとせくらべはけふぞ初むる　（子日・長嘯・七七三）

23　空の緑今朝の朝日の紅に柳桜の春をみるかな　（立春・貞徳・七九六）

の22と23の二首が示唆を与えるようだ。すなわち、22の歌は木下長嘯子の詠で、『挙白集』の四十八番に、23の歌は松永貞徳の詠で『逍遙集』の二十九番に各々、同題で収載をみているのである。両歌とも詠作年時は不明だが、前者については、もっとも流布した版本『挙白集』には刊記がないものの、山本春正による跋文から、慶安二年（一六四九）の刊行であることが推測される。また、後者については、『逍遙集』の序文を草した以悦の説明によると、23の詠は天正末年から正保初年までの詠作を部類した歌群に収載されていることになるが、その正確な詠作年時は不詳である。ちなみに、『逍遙集』の最古の伝本は延宝五年（一六七七）刊行の版本であるので、本集の編者が版本から23の詠を採歌したとなれば、本集の成立時期は延宝五年（一六七七）以降となるであろう。

以上のとおり、本集の成立時期を特定するに足る充分な手掛りはほとんどなかったわけだが、これらを要すれば、本集の成立時期は、現時点では、上限が慶安二年（一六四九）以降、下限が延宝五年（一六七七）以降と一応、想定されるであろうか。

六　編纂目的・編者などの問題

次に、本集の編纂目的は何であろうか。この問題については、詠歌作者の問題を言及した際に、本集が古くは新古今時代の藤原家隆と飛鳥井雅経の詠歌を収載するものの、その大半は室町中・後期の歌人でほぼ占有され、それに少数の江戸時代初期の歌人が加わる傾向が認められるなか、強いていえば、三条西家、飛鳥井家、伏見宮家関係の歌人がめだつ存在であると要約したことと、また、歌題の問題に言及した際にも、本集の歌題の大半が、文安三年以降に考案された歌題を収載している実態から、収載歌と詠歌作者の視点からみた場合と同様の傾向が窺知されると確認して、本集が、室町中・後期以降の歌壇、もしくは和歌の詠作状況を、如実に反映した類題集であるといいようと結論づけたことなどから、示唆が得られるであろう。

すなわち、さきに整理した江戸時代初期の詠歌作者を概観すると、いわゆる近世堂上歌人と称される人物が大半をしめていることが知られよう。となると、本集の編纂目的は、これらの堂上歌人が歌会などで題詠歌を詠む際に参考になる情報を提供することに存するといえるであろう。ただ、本集の内容をみると、すでに指摘したように、本集は、整然と緊密な構成原理のもとに編纂された類題集というにはほど遠く、多くの小歌群が雑居するあまりにも雑然とした、言わば寄せ集め的草稿本の性格は否めないところである。その点、本集から、歌会などで直ちに題詠歌を詠む情報を得るには、あまりにも不便な書であるといわねばなるまい。となると、本集の集名の「温知和歌集」が示唆するように、「温知」とは「温故知新」の略で、古きをたずねて新しきを知る意、つまり、昔の事柄をよく調べ、新しい物事に適応すべき知識・方法を得ることであるから、本集の役割には、実用面よりはむしろ理論面での効用が指摘されるのかも知れない。なぜなら、題詠歌を研究的視点から扱うとすれば、研究対象はむしろ雑

然とした内容のほうが好都合であるからである。本集の内容が未整理で、寄せ集め的雑纂形態である実態は、このような意味を担っているからであろうか。

それはともかく、本集の内容面での具体的な特徴として、三条西家、飛鳥井家、伏見宮家関係の歌人がめだつと指摘した点については、いかがであろうか。

まず、三条西家については、第三代の公保（一首収載）が、堯孝に口伝を受け、『新続古今集』の寄人となって、撰者飛鳥井雅世に協力、後花園天皇を中核とする宮廷歌壇で活躍しはじめたことが端緒になって、宮中歌壇との関係が生じた。その後、実連（一首収載）は夭逝したが、その弟実隆（五三首収載）が家督を嗣いで、公枝（一九首収載）・実枝（三首収載）・公国・実条（二首収載）と代々和歌・有職故実の学問に励み、近世初期の文事隆盛に多大な貢献をしたことは周知の事柄であろう。就中、実隆・公条は、後奈良天皇（二三首収載）・正親町天皇（一首収載）に『古今集』『伊勢物語』『源氏物語』などの伝授を行なって、三条西家の家学を宮廷の学問として定着させた功績は高く評価されるであろう。

一方、『新古今集』の撰者の一人、雅経（二五首収載）を祖とする飛鳥井家については、第二・第三代将軍足利義詮・義満邸の歌会に出席して活躍し、『永和百首』の作者にもなった雅家あたりから、とくに将軍家との文事面での関係が密接になったが、その子雅縁（宋雅、九首収載）に至って、義満には勿論のこと、第四代の義持（一首収載）にも仕え、公武権門の人びとにも信任された。飛鳥井家の歌壇的地位は、この雅縁の時代に確立されたといえ、同家は二条・冷泉家とほぼ並ぶ歌道師範家の一つとなったわけである。雅縁の子息雅世（一四首収載）もまた、義満・義持・義教（第六代将軍、一首収載）に仕え、幕府歌会の第一人者になって、義教の執奏を得て『新続古今集』の撰者になった。また、雅世の弟雅永（九首収載）はそれほど活躍はしなかったが、古典の書写活動などでは目につく存在であった。雅世の子雅親（栄雅、二九首収載）も、第九代将軍義尚（三首収載）の執奏を得て、勅撰

集の撰者を受命したが（この企画は応仁の乱で中絶）、義尚主催の歌合の判者や公武歌会の点者になるなど、一条兼良没後の歌壇の領袖となった。雅親の弟雅康（宋世、九九首収載）も和歌に堪能で、文明期の歌壇で尊重されて、自邸で歌会を催したりしている。飛鳥井家は、以後、雅俊（八首収載）・雅綱（二首収載）・雅春（一首収載）・雅敦（一首収載）・雅庸（一首収載）・雅宣・雅章（一首収載）と続き、江戸時代まで歌道師範家としての命脈を保ったが、なかでも雅章が、堂上歌人として後水尾天皇から古今伝授を受けるなど、宮廷歌壇で活躍したことは周知の事実であろう。

最後に、伏見宮家については、北朝持明院統崇光天皇の第一皇子栄仁親王が始祖で、第二代治仁親王・第三代貞成親王・第四代貞常親王（四首収載）・第五代邦高親王（恵空、二七首収載）・第六代貞敦親王（四首収載）・第七代邦輔親王・第八代貞康親王・第九代邦房親王（一首収載）・第十代貞清親王と続き、以下省略するが第二十二代博恭王まで至ったが、昭和二十二年、皇籍を離脱したことも周知の事柄であろう。同家が宮廷歌壇と密接な関係にあったことは、今更言うまでもない。

このように、本集の内容に認められる具体的な特性は、室町以降の宮廷歌壇や足利将軍などの武家歌壇と密接にかかわるものであって、本集の編纂目的は、これらの歌壇に属する歌人たちの営為と深い関係にあるといえるであろう。

ところで、本集が未定稿の性格をもつ草稿本的性格の類題集である点については、「二　内容」の節ですでに言及したが、それでは、本集は草稿本そのものの原本であろうか。その点については、

24　いすゞ川　本ノマヽ　（神祇・恒明・八八五）

の24の詠歌について初句のみを掲げた後に、「本ノマヽ」の注記を付していることから、本集が書写本であることは確かであろう。となると、本集はこのような草稿本的内容のまま何故に放置されていたのであろうか。実用面で

の利用度を重視すれば、おそらく本集は部立別に部類され、歌題も重複する場合にはひとつに整理して、一定の配列原理のもとに構成されたはずであろう。にもかかわらず、本集がこのような未定稿的な姿をそのまま留めているのは、依拠した典拠を、もとの小歌群のままで読解・鑑賞することを目的にしたためであろうか。本集の雑纂的な体裁は、このような編者の編纂意図を表明した結果なのであろうか。

いずれにせよ、現時点で本集の正確な編纂目的を推断するのは、困難といわざるを得ないようである。

最後に、本集の編者は誰であろうか。この問題についても、現時点で編者を想定するのははなはだ困難な課題といえよう。とはいえ、あえて憶測を逞しうすれば、本集には、『新古今集』の撰者のひとりであった飛鳥井雅経以下、代々の飛鳥井家の歌人の詠歌が江戸時代初期の雅章に至るまで連綿と引き続いて採歌されている実態からみて、その候補者として飛鳥井雅章などが想定されるのではあるまいか。まったくの憶測にしかすぎないが、ひとつの可能性をして飛鳥井雅章編者説を提出しておきたいと思う。

なお、本書と将軍徳川吉宗などを輩出した、紀州和歌山藩との関係については未詳の事柄に属する問題である。

七　おわりに

以上、『温知和歌集』の成立について、種々様々な視点から基礎的考察を進めてきたが、ここで改めてこれまで論述してきた要点を箇条書きで摘記すれば、おおよそ次のごとくなろう。

（一）『温知和歌集』は現在、和歌山大学附属図書館に、写本二冊として伝存するものが、唯一の伝本である。

（二）本集は、千三百二十八首を収載する雑纂体裁の類題集であるが、収載歌のなかには新出歌を見出すことができるようだ。

（三）本集の内容を精査すると、おおよそ六十足らずの小歌群から構成されているようで、この構成から、本集は草稿本的様相を呈しているといえようか。

（四）特定しえる典拠は、「詠花鳥和哥」（宋世）「名所百首和歌」（道堅・実隆）「千五百番歌合」（雅経）「詠百首和歌」（兼成）「詠三十首和歌」（恵空）「文明十三年十一月二十日三十番歌合」（義尚・為富・親長・雅康・公躬・高清・基綱・為広・実隆・永継・政国・宗伊・政茂・頼行・政行・貞頼・政凞・元為・重信・玄就）「飛鳥井家二十首続歌」（雅世・堯孝・雅永・雅親・政法）「正応三年九月十三夜同詠三首応製和歌」（持明院・家基・公守・資宣・為世・経親・隆博・俊定・為兼・冬良・為実・為道・家親・定成・隆教）「天正五年親王家五十首」（誠仁親王）のとおりで、室町中・後期に成立した作品が多いようである。

（五）詠歌作者の上位十五位は、兼成・雅康（宋世）・光広・実隆（堯空）・道堅・堯孝・雅親（栄雅）・正徹・邦高親王（恵空）・雅経・家隆・後花園天皇・後奈良天皇（知仁）・公枝（仍覚・称名院）・雅世のとおりで、室町中・後期から江戸初期にかけての歌人が多いようである。

（六）歌題の視点からいうと、文安三年（一四四四）以降に考案された歌題が大半をしめ、室町中・後期以降の歌壇、もしくは和歌の詠作状況を、如実に反映している。

（七）成立時期は、上限が慶安二年（一六四五）以降、下限が延宝五年（一六七七）以降と一応、想定されようか。

（八）編纂目的は、近世初期の堂上歌人が歌会などで題詠歌を詠む際に、参考になる情報を提供することにある、と一応言えようが、本集の雑纂体裁からみると、実用面よりは理論面での効用も否定しえないようにも憶測されよう。

（九）編者をあえて想定するならば、飛鳥井雅章などが候補にのぼるであろうか。

なお、本集について検討しなければならない問題は、このほかにもいくつかあるかも知れないが、成立の問題について一応の基礎的考察を終えたいまは、それらの問題は今後の課題にすることにして、このあたりでひとまず、蕪雑な作業報告の筆を擱くことにしたいと思う。

ちなみに、本集の翻刻紹介については、次号の本紀要に掲載を予定している。